

公益財団法人 松園尚己記念財団

東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会ボランティア活動支援事業 参加者レポート

「活動レポート」

片山花音 長崎大学

担当:大会関係者のアテンド（ホテルオークラ等）

ボランティアを志すきっかけ

中学校 3 年生の時に東京オリンピックの開催が決まり、世界中の人と関われるチャンスであり、日本のことを世界に知ってもらえることができると漠然と思ったことがボランティアに参加したいと思ったきっかけです。もともと、幼いころから好奇心旺盛で誰よりも多くいろんなことに関わりたいという思いが強かった性格も今回ボランティアをしようと思ったことにつながっていると感じます。

延期になった時の気持ち

一年延期という決断が下されたときは本当に来年も開催されるのかと不安な気持ちはありました。しかし、世界的にパンデミックが起こっていたことから、命の危険を冒してまでする必要はないとも思いました。この東京オリンピックのために練習してきた選手たちのことを考えると、とてもやるせない気持ちになりましたが、ボランティアをさせてもらえるのであれば、何らかの形で来年関わらせてもらおうと決心しました。

実際に活動して感じたことや体験したこと

実際にボランティアをして、1 カ月間毎日初めて出会う多くの人と関わる中で改めて思ったことは二つです。

一つ目は、舞台裏のたくさんの人の支えの上に成り立っていることです。

私は、スポーツの競技に関わるのではなく、国際オリンピック協会である IOC の元でボランティアをしました。華やかなオリンピックを支えているたくさんの国の人たちが、7 年もの期間、無事開催できるようにと準備をしていたことを IOC の方々と関わる中で実感しました。これはオリンピックに限らず、日常生活の中でも多くの人の支えがあることに改めて感謝しないといけないと思います。

二つ目は、オンラインでも多くの人を感動させ、笑顔にすること、つながることができるということです。今回のオリンピックは無観客になってしまいましたが、期間中毎日様々な競技の中継やハイライトを通して感動させてもらいました。

賛否両論ありますが、私はこの一か月間で、忘れられない経験と多くの出会いがありました。

実務としては、約 8 時間前後、IOC の本部が設置されたホテルオークラ東京で、開閉会式のチケットお渡し、IOC の方が日々アシスタントの方とコンタクトを取るためのスマートフォンのお渡し、競技日程や会場のご案内等、オリンピックファミリーと呼ばれる大会関係者の方向けのインフォメーションデスクで働きました。また、オークラ内で関係者のみが入れる会場前での検温や身分チェッ

クも行いました。一緒にボランティアをする人は毎日違う人と接し、合計すると約 100 人の方と一緒に実務をさせていただきました。

活動を終えての感想

辞退せずに参加させていただけて一生の思い出になったと思います。出発直前まで、渡されている情報があまりにも少ないこと、コロナ対策が不透明なところなど、正直、ボランティアに対する姿勢がずさんだなと感じていました。しかしながら、数日勤務する中で、日々職員として働かされている人たちも目まぐるしく変わる情報の中で対応されていることを知り、とても大変なお仕事されていることに感動しました。賛否両論ありますが、私は本当に東京オリンピックが開催できて、多くの人と関わって、自分自身も成長できましたし、毎日スポーツの力ってすごいなと実感しました。また、スポーツには関わらず、裏方の仕事をさせてもらう中で、多くの人への支えの元、大きな事件事故などなく、大会ができていることに感動しました。多くの外国人（約 200 か国）と関わる中で、彼らはホテルから出られない中、私たちが隙間時間に作った折り紙の鶴などを見てとても喜んでくれ、お土産に母国に持って帰ってくれました。一緒に鶴を折ったこともありました。日本のおもてなしを多くの観光地を訪れたり、外食したりして実感する機会は少なかつたろうと思いつつ、小さな「おはようございます」などの挨拶も笑顔で嬉しそうにしている姿を毎日見て、日本を少しでも感じてくれていたらいいなと思います。

今回の経験を通して、たくさんの当たり前や日本のすばらしさ、スポーツの持つ力に気づかされました。来年から社会人になるので、少しでも生かせるように、またこれからの私の糧になるように、しっかり学んだことを実行したいと思います。